

秋 号

2014.10.3

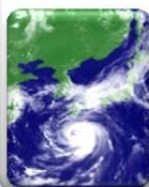
No.11

空のしおり

Narita Aviation Weather Information Magazine



発行
成田航空地方気象台



Topics

- ・台風第8号と第11号



～防災の話～

- ・避難勧告と避難指示



Column

- ・空もよう



Explanation

- ・台風 その時に備えて
- ・成田空港の気候～2014夏～



Information

- ・気象台からのお知らせ

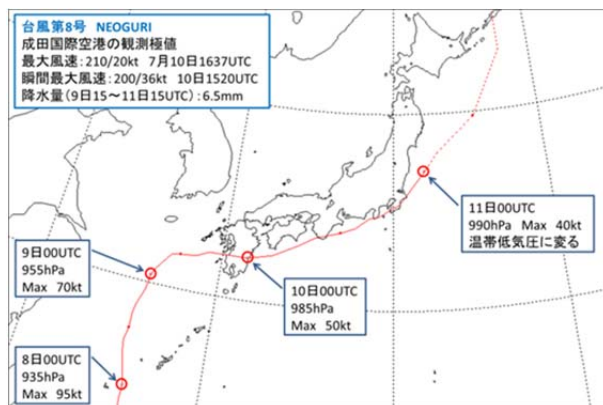


空の駅 風和里しばやま



台風第8号と第11号

今年は、7月に台風第8号、8月に台風第11号が本州に上陸し、9月も勢力こそ強くありませんが台風第16号は東シナ海を東進して本州に接近し、台風第17号は小笠原諸島の東海上を北上しその後日本の東に遠ざかりました。ここでは、台風第8号と第11号を振り返って見たいと思います。

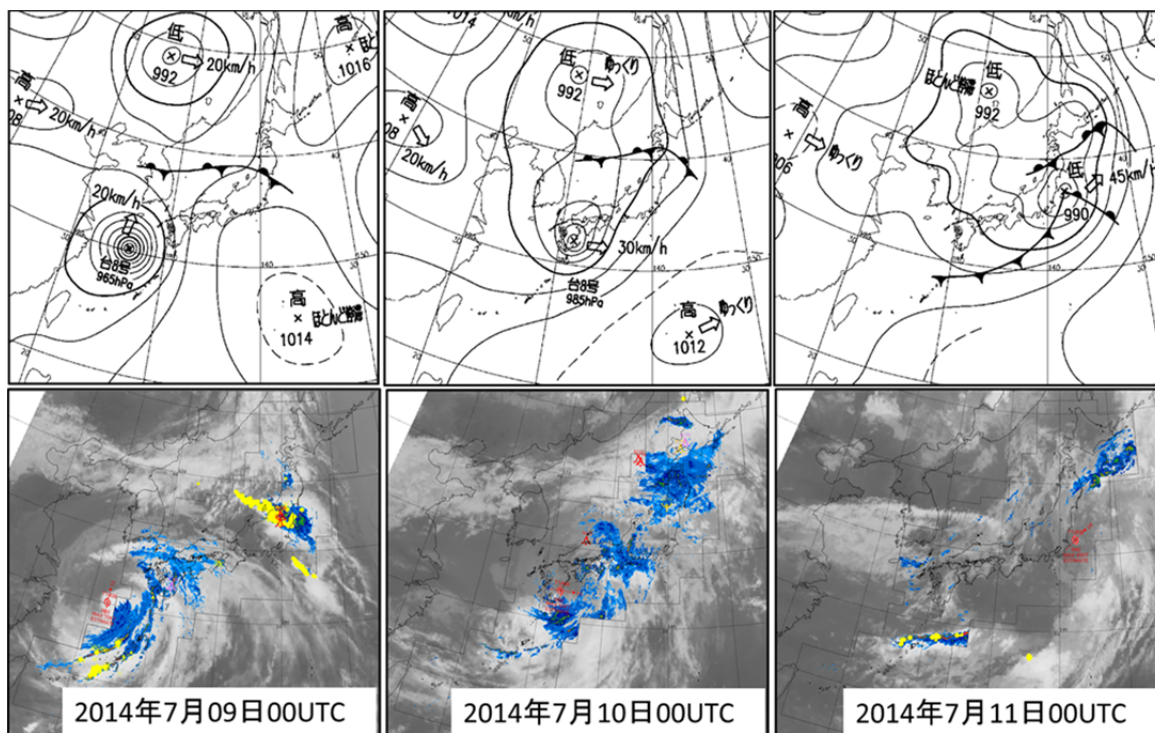


1. 台風第8号

第1図は、台風第8号の経路図に、各日の00UTC（日本時間の午前9時）の中心気圧と最大風速を示したものです。沖縄地方を北上中の8日00UTCには、中心気圧935hPa、最大風速95ktで非常に強い台風でした。9日00UTCかけて最大風速を70ktにやや勢力を弱めながら東シナ海を北上し、その後、進

第1図 台風第8号(NEOGURI)の経路図(7月8日～11日)

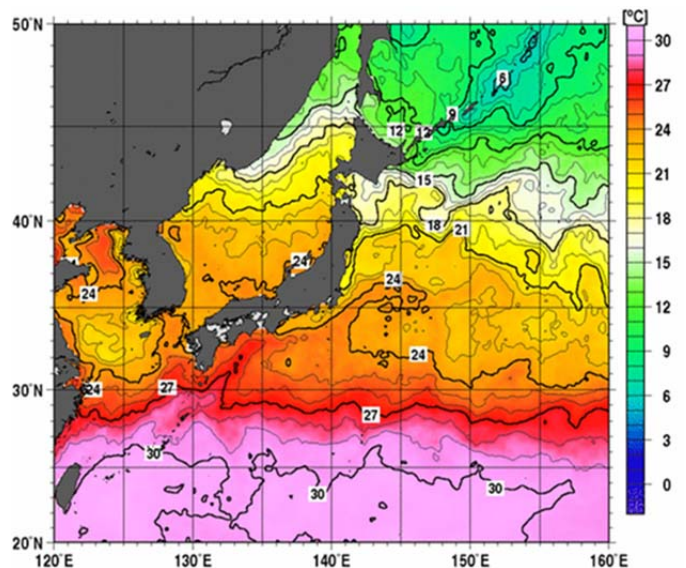
路を東に変え九州南部に上陸しました。10日00UTCに宮崎県沿岸で中心気圧985hPa、最大風速50ktと勢力が衰えました。その後は、急速に速度を速め、西・東日本の太平洋沿岸を東北東進し、11日00UTCには福島県沖で温帯低気圧に変わりました。



第2図 地上天気図(上段)と国内悪天実況図(下段)
下段の国内悪天実況図は、気象衛星赤外画像、レーダーエコー、雷(黄色の部分)、台風の中心位置等を重ねた図。

第 2 図は、9 日から 11 日の 00UTC の地上天気図（上図）と気象衛星赤外面像、レーダーエコー、雷検知等を重ねた図（下図）です。9 日 00UTC には台風の東側で気圧の傾きが大きく、台風を中心や周辺で発達した対流雲が観測され、特に台風の南側では線状の対流雲が発達して雷を伴っています。また、台風から遠く離れた前線近傍でも対流雲が発達し、活発に発雷している状況がわかります。10 日 00UTC には、台風周辺の気圧の傾きは小さくなりますが、まだ台風の南側では活発な対流雲と降水域が観測されています。また、暖湿気の流入と地形の影響により、紀伊半島や東海地方でも降水域が観測されています。台風の東進による、東海地方の降水域の動向が注目されましたが、台風の弱まりと共にレーダーエコーも弱まり、11 日の 00UTC には台風から変わった低気圧周辺には発達した対流雲やレーダーエコーは見あたりません。

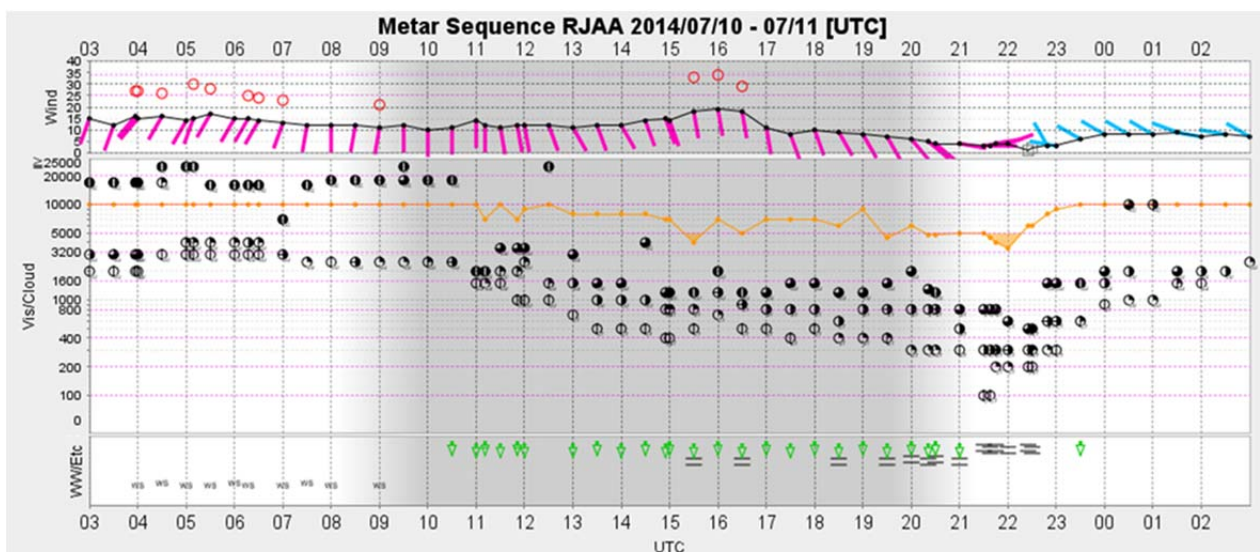
第 3 図は、7 月 10 日の日本近海の海面水温です。これを見ると、北緯 30 度付近までは 27℃前後の水温が観測されていますが、本州近海では 25℃以下と



第 3 図 日本近海の海面水温
(2014 年 7 月 10 日)

なっています。台風は暖かな海水からエネルギーを補給しますので、九州南部に上陸し太平洋沿岸を東北東進した台風が急速に勢力を弱めたことと良く対応しています。

この為、関東地方での台風の影響は小さく、成田空港での観測は台風が東海道沖に接近した 10 日 16UTC 前後に、南南西の風で最大風速 20kt、瞬間最大風速 36kt、降水量も 6.5mm（9 日 15～11 日 15UTC）にとどまりました。第 4 図は成田空港で観測した風や卓越視程、雲



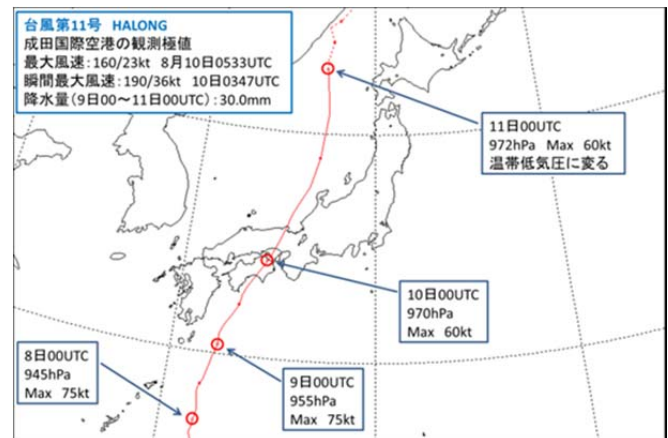
第 4 図 成田空港のシーケンス図(2014 年 7 月 10 日 03UTC⇒7 月 11 日 03UTC)
上段：風（グラフは風速、線は風向、○はガスト[単位 kt]）、中段：折れ線は卓越視程[単位 m]、記号は雲量・雲高[単位 ft]、下段：現在天気等記号、灰色の背景は夜間を示す。

底の高さ、天気等をグラフ化（以下、シーケンスと呼ぶ）した図です。10日の日中はガストを伴った南よりの風がやや強かった為、ウィンドシアアの報告が多く、雨の強まりやもやにより一時的にIMCになりましたが、長時間の悪天になることはありませんでした。

しかし、西日本の各地で記録的な大雨を観測した他、暖湿気の流入や前線近傍の集中豪雨により山形県や長野県等、台風から遠く離れた地域でも河川の氾濫や土石流等により、死傷者も含め多大な被害が発生しました。

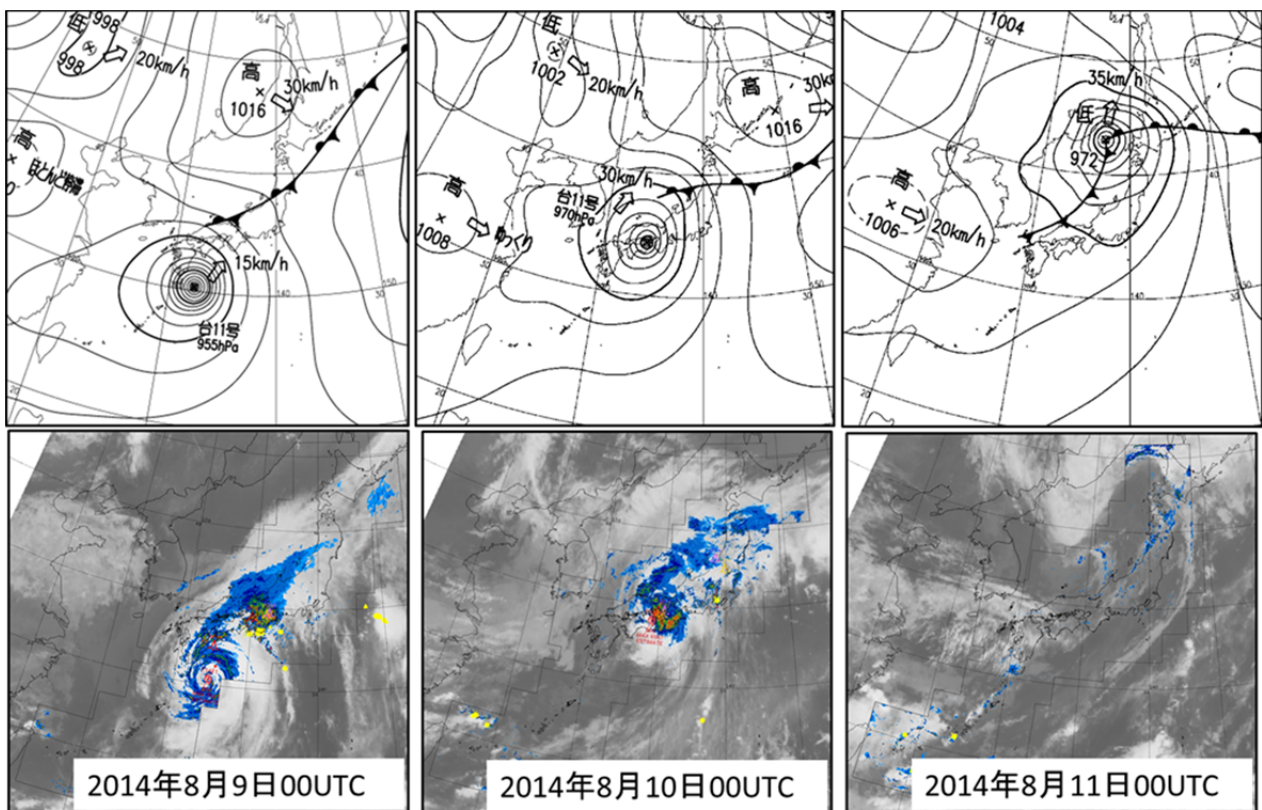
2. 台風第11号

台風第8号と同様に台風第11号の経路図と地上天気図と気象衛星等を第5・6図に示しました。台風第11号は、奄美大島の東海上を北上し8月9日00UTCには、種子島の東海上に達し、



第5図 台風第11号(HALONG)の経路図(8月8日～11日)

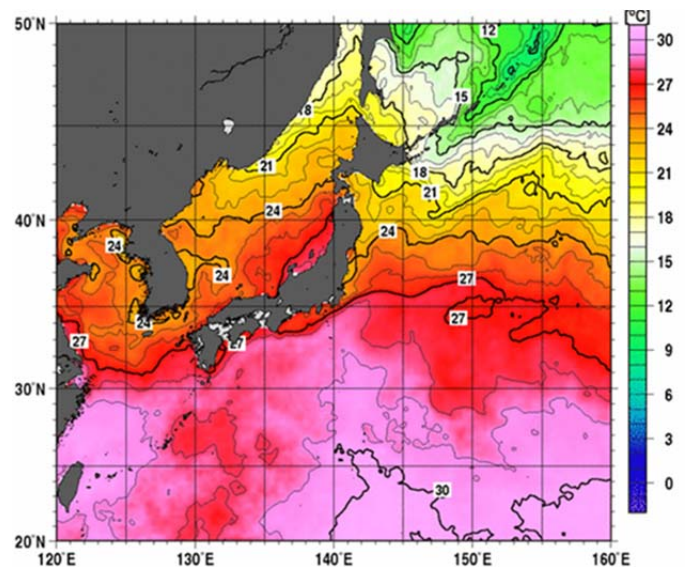
勢力は中心気圧が955hPa、最大風速は75ktの強い台風で、中心付近の同心円状の気圧の傾きが大きく、台風の間目ははっきりしていました。また、台風を中心付近だけでなく、前線に向かって暖湿気が流入した紀伊半島や東海地方では、地形の影響もあり雷を伴った活発な対流雲が停滞していました。台風第11号は



第6図 地上天気図(上段)と国内悪天実況図(下段)
下段の国内悪天実況図は、気象衛星赤外画像、レーダーエコー、雷（黄色の部分）、台風を中心位置等を重ねた図。

比較的にゆっくりとした速度で北上し、9日21UTC（10日6時）頃には四国に上陸します。上陸後の10日00UTCには970hPa、最大風速60ktと勢力をやや弱めますが、台風を中心付近にあたる四国や近畿地方では風雨共に強く、各地で記録的な大雨を観測し、暖湿気の流入や台風中心付近の対流雲による大雨の続いた三重県では、大雨特別警報が発表され、各地で河川の氾濫や浸水による被害が発生しました。台風第11号は、日本海に入ると速度を上げ、後面から寒気が流入し11日00UTCには、日本海北部で温帯低気圧に変わります。中心付近の対流雲は衰弱しますが、気圧は972hPaで最大風速も60ktと北日本では風の強い状態が続きました。

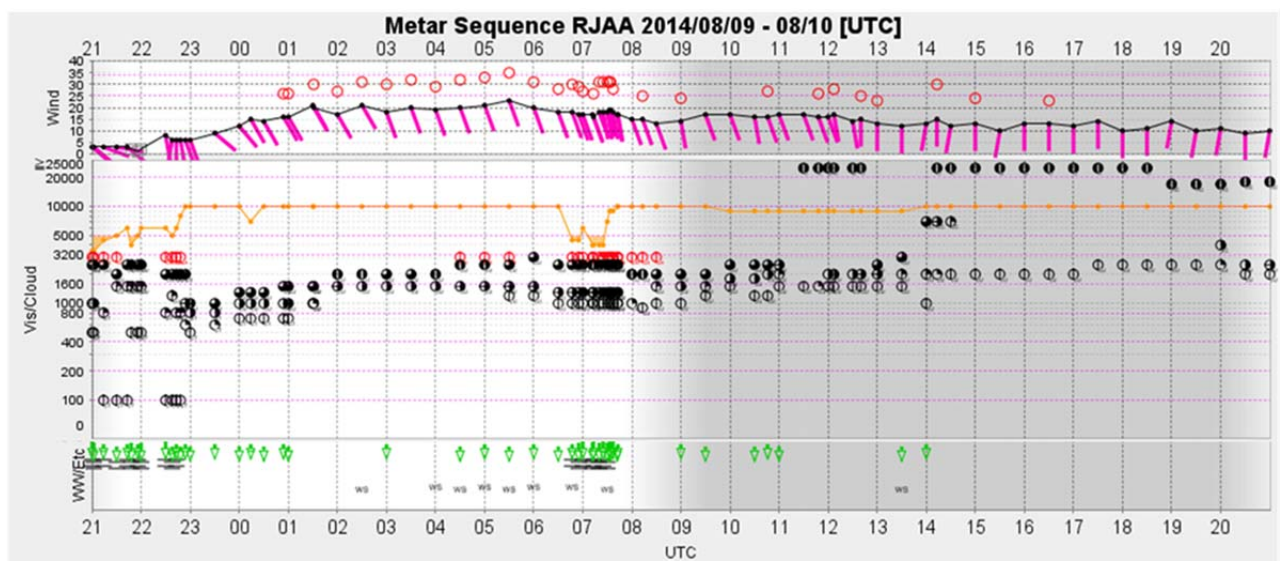
第7図は、8月10日の日本付近海の海水温を表した図です。台風第8号の時と比べると、27℃以上の海水温の領域が東西日本の太平洋沿岸まで達しています。この為、上陸するまであまり勢力が衰えず、また、速度が速かったことから近畿や東海地方を中心に大雨による被害をもたらしています。関東地方は



第7図 日本近海の海面水温
(2014年8月10日)

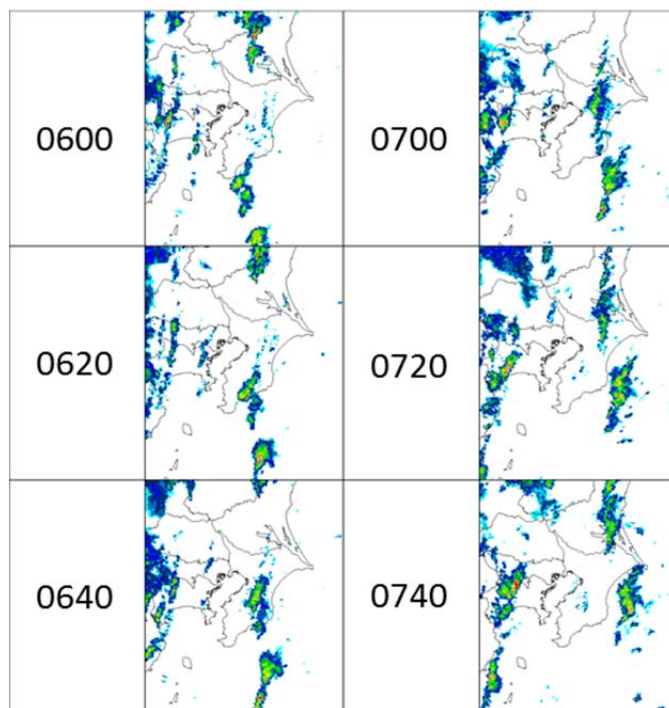
広範囲わたる大雨等は発生しませんでした。第6図8月10日00UTC、中央下の気象衛星等の図を見ると、伊豆諸島から神奈川県に線状の雲域やレーダーエコーが観測され、一部で雷も検知されています。

成田空港では、このレーダーエコーが接近した10日昼過ぎ0533UTCに、台風第11号に伴う最大風速23kt（風向160度）を観測（瞬間最大風速は0347UTC 36kt）、07UTC前後には一



第8図 成田空港のシーケンス図（2014年8月9日21UTC⇒8月10日21UTC）
上段：風（グラフは風速、線は風向、○はガスト[単位 kt]）、中段：折れ線は卓越視程[単位 m]、記号は雲量・雲高[単位 ft]、下段：現在天気等記号、灰色の背景は夜間を示す。

時的に強い雨が降り、視程も 4000m 程度に悪化しました（第 8 図参照）。この時のレーダーエコーを 20 分毎に示した図が第 9 図です。0620UTC には海上から房総半島の南部に線状のレーダーエコーが速い速度で北上し、0700UTC 前後には成田空港付近にかかります。もう一つのレーダーエコーが後に続いています。こちらは房総半島沖を北上し、成田空港には直接の影響はありませんでした。なお、神奈川県西部は地形的な効果も加わり、断続的に線状のレーダーエコーがかかっていることが解ります。成田空港での 8 月 10 日（日本時間）の日降水量は 30.0mm ですが、神奈川県小田原の 10 日の日降水量は 88.5mm で、朝 08 時～09 時の 1 時間降水量は 52.5mm に達しています。また、10 日昼頃には、栃木県栃木市付近で竜巻が発生し家屋等に被害が発生しました。



第 9 図 関東南部のレーダーエコー
(2014 年 8 月 10 日)
左の数字は時間 (UTC)

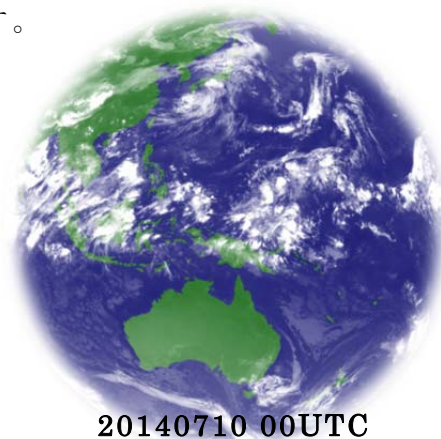
3. 今後の台風

台風はそれぞれに個性があります。これまで本州に上陸した第 8 号、第 11 号では、西日本や東海地方を中心に河川の氾濫や浸水による被害が発生しましたが、台風から遠く離れた東北地方や長野県等、前線の近傍や暖湿気の流入による集中豪雨に伴う被害が発生しています。関東地方南部や成田空港に顕著な被害はありませんでしたが、太平洋高気圧が後退するステージに入る 9 月、10 月は、例年台風が本州に接近、上陸することが多くなっています。

また、前述のように相対的に冷たい空気と台風がもたらす暖かく湿った空気の間で、前線の顕在化や活動の活発化は、台風から遠く離れていても大雨をもたらすことがあります。日本近海の北緯 30 度以南では、まだ海水温も高く、南

下する偏西風の蛇行に乗れば、台風が勢力を弱める間も無くスピードを速めて北上し、本州付近に接近、上陸する可能性もあります。

当気象台では、今後も成田空港に大きな影響をおよぼす台風について、運航関係者の方を対象に説明会を開催し、航空気象情報提供システム (MetAir) に「台風に関するお知らせ」を適宜掲載してまいります。





台風 その時に備えて

1. 発生

○台風の接近や上陸によって暴風雨になったら外へ出ない

- ・台風の際は、建物内で通り過ぎるのを待つのが基本です。通過しているときは、外へ出ないようにし、通り過ぎたあとは吹き返しの強風が吹く場合がありますので、注意しましょう。
- ・突然やってくる地震などと違い、台風は数日前にはおおよそその進路などが分かります。気象台から発表される最新情報を得て、屋根の補修などは、台風が近づく前に済ませておきましょう。

※気象庁や自治体から発表される最新情報には常に注意しましょう。

○地下施設から地上へ、地上からより高い場所へ避難する

- ・地下施設にいるときは、実際外で降っている雨の状況などが分かりにくく、地上が冠水すると避難路から一気に水が流れ込み、地上に避難することが困難になるおそれがあります。地上に出てからも、指定の避難場所に移動するより、近隣の2階以上の丈夫な建物に避難する方が安全な場合もあるため、避難する場合は周囲の状況を総合的に判断し行動するようにしましょう。

○流れている水に近づかない

- ・河川や用水路の水があふれ、その周辺にも激しい水の流れることができます。マンホールや用水路のフタが開いているのに気づかず落ちてしまうケースも多くあるため、雨が降っているときは絶対に近づかないようにしましょう。また、今いる場所が小雨でも上流で大量に雨が降った場合は、急な増水の恐れがあります。雨がやんだ後でも、河川や用水路の周囲だけでなく、流れのある水のそばには決して近づかないようにしましょう。

○エレベーターを使わない

- ・暴風によって送電線が切れたり、停電になることもあるため、エレベーターの使用は極力避けましょう。

○山などの急な斜面には近づかない

- ・大雨による土砂災害の危険度が高まったとき、土砂災害警戒情報が発表される場合があります。
- ・土砂災害警戒情報が発表されていなくても、「斜面から小石が落ちてくる」、「湧き水がにごる」などの前兆現象が見られた場合は、安全を確保したうえで避難するとともに、自治体や警察、消防などに通報しましょう。

2. 避難

○避難準備情報が出された場合は、速やかに要援護者の避難を

- ・市役所などの行政から避難準備情報が出たら、高齢者や乳幼児を優先に、自動車を使うなどして、すみやかに安全なところへ移送しましょう。
- ・避難するところとしては、高台などの避難所、親類縁者の家、福祉施設等を利用しましょう。

○行政から避難勧告が出た場合は、複数で行動する

- ・行政から避難勧告が出たら、戸締まりをして近所の人に声をかけ、一緒に徒歩で避難しましょう。
- ・避難するときは、運動靴やトレッキングシューズなら、冠水した道路も比較的歩きやすいです。

○避難は周囲の状況を確認してから

- ・避難する際は周囲の状況を確認してから避難場所へ向かいましょう。
- ・50cm以上の水深で浸水が発生している場合は、無理に避難しないほうがよい場合があります。
- ・山などの斜面で以下の現象が発生している場合、直ちに斜面から離れましょう。
 - 斜面にひび割れが生じる
 - 小石が落ちてくる
 - 土の匂いがする
 - 斜面から水が湧き出る
 - 湧き水や井戸水がにごる
 - 地鳴りが聞こえる

○避難する際の服装

- ・頭を保護するヘルメット等を着用する。
- ・動きやすい長袖と長ズボン、軍手を着用する。
- ・長靴ではなく、普段から履きなれた底が厚めの靴を履く。
- ・両手は空いている状態にし、非常用品等はリュックに入れて避難する。

○避難する際の注意

- ・可能な限り複数人で避難しましょう。
- ・浸水している場合は、傘などの棒状のものを使って地面を探りながら避難しましょう。
- ・マンホールや側溝付近は大変危険です。絶対に近づかないようにしましょう。
- ・夜間に避難するのは大変危険なので、避難はできるだけ明るい時間にしましょう。

○近所の頑丈な建物に避難する選択肢も

- ・鉄筋コンクリート製の建物に避難しましょう。その際は斜面から離れたフロアへ移動しましょう。
- ・自宅にとどまる場合も、できるだけ高い階の斜面から離れた部屋に移動しましょう。
- ・消防、警察、自治体に救助の要請も忘れずに。

3. 備える

○屋根や家の周りのものにも注意

- ・風で屋根瓦が飛ばば、怪我では済まされない事故になることもあります。事前に雨漏りの心配がないか、外壁のひび割れはないかなども確認しておきましょう。
- ・テレビのアンテナや倒れる可能性のある塀、自転車や鉢植えのように飛ばされる恐れのあるものは、ロープで固定したり屋内にしまったりといった対策をとっておきましょう。

○事前に排水設備の点検・掃除をする

- ・排水溝のつまりが原因で、道路や庭などに雨水が溜まると、地下室・駐車場などが被害を受けます。また、ベランダの排水溝や雨どいが、落ち葉やゴミなどでつまっていると、2階以上への浸水や天井裏への浸水などが発生することがあります。普段から雨水の排水設備関係の点検・掃除を心がけておきましょう。

○低地の居住者は土のうなどを用意する

- ・低地や川沿いの住居には、浸水をせき止めたり浸水の時間を遅らせたりすることができる土のうの活用も有効です。
- ・土のうがないときは、ゴミ袋に水を入れて水のうを作り、コンクリートブロックで固定したり、水の入ったペットボトルをダンボールにつめ、簡易の堤防にするとといった代替方法もあります。

○上流にダムがある場合

- ・ダムは洪水調節の役割も担っているため、大雨時には放流量が急激に増えることもあります。放流を予告するサイレン音を聞いた場合は、河川には絶対に近づかないようにしましょう。

○居住地域の災害史を学ぶ

- ・過去にどの程度の降水量で浸水や土砂災害に見舞われたのかなど、居住地域で発生した災害を学ぶことも重要です。
- ・居住地域の災害史を学ぶことで、大まかな目安として災害発生の危険性を降水量から把握することができます。

各家庭でいざというときに備える「持ち出し品」「備蓄品」のリストです。

印刷してチェックリストとしてお使いください。

□[check] 持ち出し品

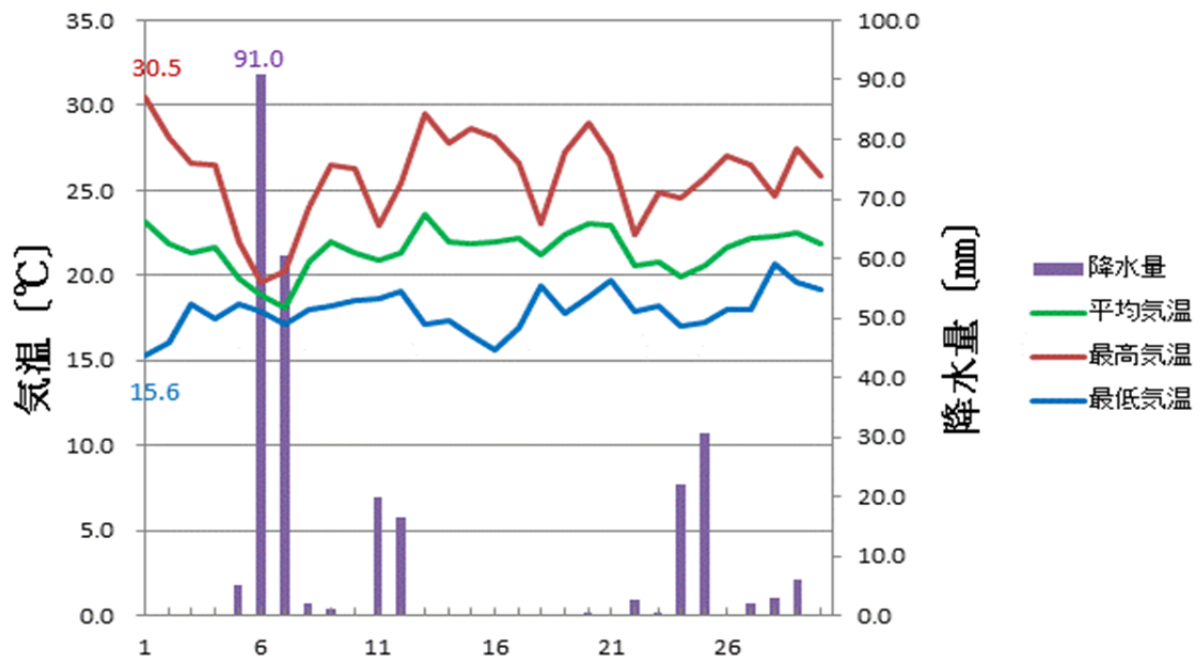
- ☐ ヘルメット
- ☐ 懐中電灯（予備の電池、電球を忘れずに！）
- ☐ 携帯ラジオ（予備の電池を忘れずに！）
- ☐ 携帯充電器（ソーラー式や手回し式でない場合には予備の電池を忘れずに！）
- ☐ 非常食（乾パン、缶詰など最低 1 日分）
- ☐ 飲料水（1 人 1 日 2～3 リットル×家族の人数分用意したい）
- ☐ 救急医薬品（常備薬、きず薬、ばんそうこう、痛み止め、ガーゼや脱脂綿、包帯、解熱剤、風邪薬、胃腸薬、目薬など）
- ☐ ろうそく、ライター（マッチ）
- ☐ 貴重品（預貯金通帳、印鑑など）
- ☐ 現金（買い出しのときなどに利用。公衆電話でも使えるよう 10 円玉の用意を！）
- ☐ 健康保険証、住民票のコピー
- ☐ 軍手（手を保護する防刃タイプなどが便利）
- ☐ マルチツール（ナイフ、せん抜き、缶切り、ドライバー、穴あけ工具、毛抜き、はさみなど）
- ☐ ティッシュペーパー、ウェットティッシュ、タオル ウェットティッシュは長期保存ができるものを
- ☐ ビニール袋、ビニールシート 保存容器やごみ袋、給水袋の代用などに使える
- ☐ 下着（下着上下と靴下など）
- ☐ 毛布、サバイバルブランケット、ポンチョ 寒いときに使用するほか、雨よけや着替えの際の目隠しとしても使える

□[check] 備蓄品 点検日

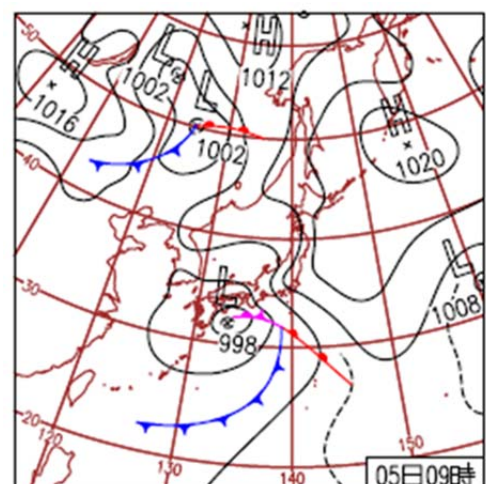
- ☐ 食品（缶詰、レトルト食品、栄養補助食品など、自宅で収納可能な日数分（理想は 10 日分）×人数分を用意したい）
- ☐ 食品（チョコレート、のど飴、梅干しなど）
- ☐ 食品（調味料、スープ、みそ汁など）
- ☐ 飲料水（1 人あたり 1 日 2～3 リットル）
- ☐ 燃料（卓上コンロ、固形燃料、予備のガスボンベなど）
- ☐ 鍋・やかん
- ☐ 簡易食器（わりばし、紙皿、紙コップなど）
- ☐ 毛布、タオルケット、寝袋など
- ☐ 洗面用具（歯ブラシ、石けん、タオル、ドライシャンプーなど）
- ☐ 使い捨てカイロ、マスク カイロは食品や体を温めるのに便利
- ☐ ラップ、アルミホイル、新聞紙など 寒いとき体にラップを巻くと体温が下がるのをおさえられる
- ☐ ウェットティッシュ、トイレトペーパー
- ☐ 予備のめがね、補聴器など
- ☐ 簡易トイレ

成田空港の気候 -2014年夏-

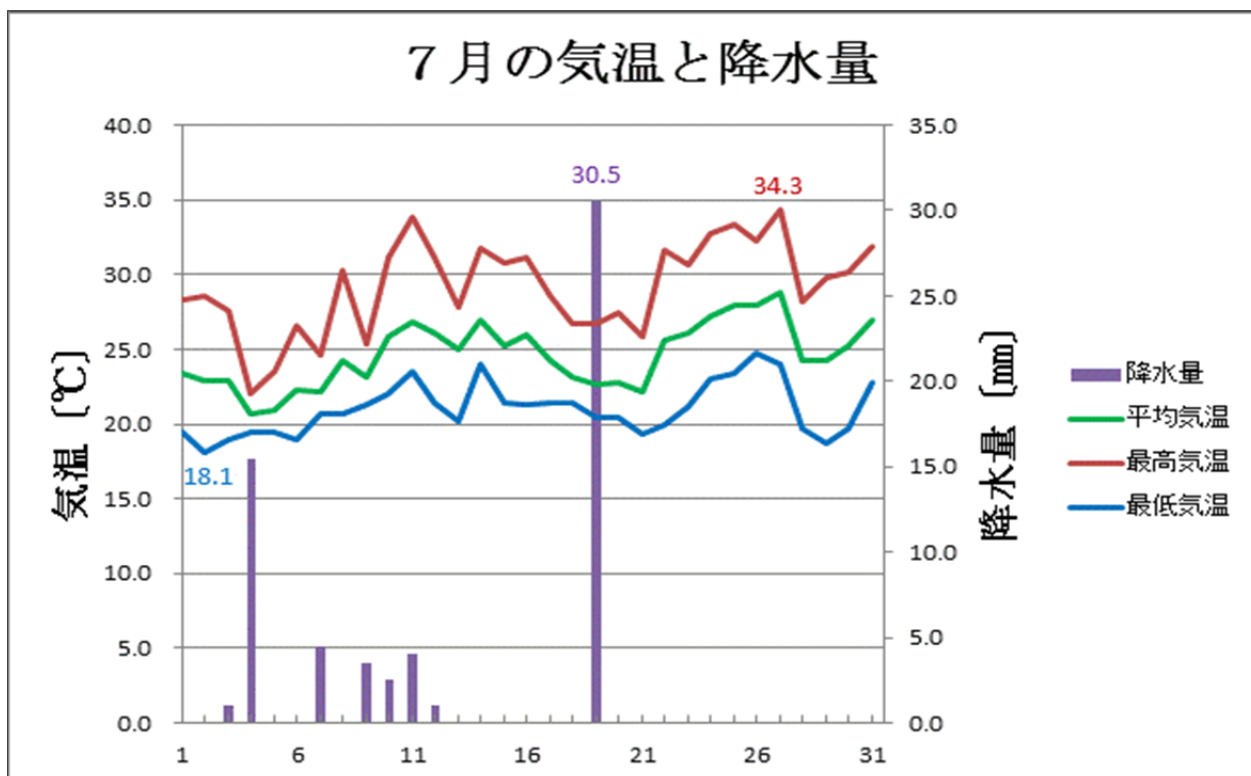
6月の気温と降水量



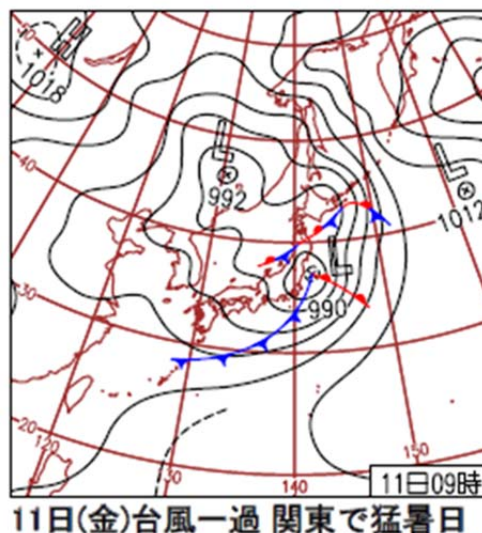
6月は、上旬は本州付近を東進した高気圧とその後に北日本を覆った千島の東の高気圧が優勢で、晴れて強い日射があったことに加えて、中国大陸から高温な空気が流れ込んできたことから、北日本を中心に気温が平年を大幅に上回りました。成田空港では1日に6月の最高気温となった最高気温30.5℃観測しています。また、2日から8日にかけて低気圧が本州南岸をゆっくりと東進し、2日に九州が、4日までに中国・四国から東海が、更に5日には東北南部まで梅雨入りしています。この低気圧により湿った空気の流入した太平洋側を中心に記録的な大雨となった所がありました。成田空港でも6日に日降水量91.0mmを観測し、これは1972年7月の統計開始以降2番目に多い記録となりました。中旬から下旬にかけては、北・東日本では高気圧に覆われて晴れる日が多くなりましたが、上空の強い寒気の影響で雷雨となる日もありました。



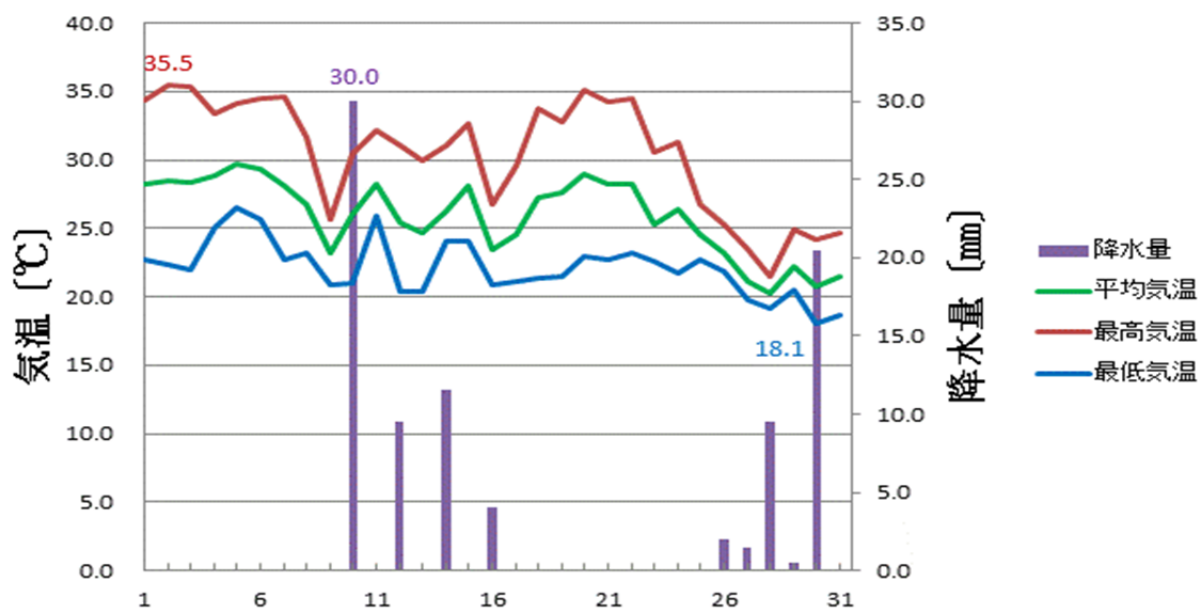
5日(木)東北南部まで梅雨入り



7月は、上旬は5日頃にかけて梅雨前線が本州の南海上に停滞し、沖縄の南から北上した台風第8号が10日から11日にかけて本州南岸を通過していきました。この影響で、沖縄本島地方では記録的な大雨となったほか、長野県で土石流による被害が発生するなど、各地で土砂災害や浸水害等が発生しました。中旬は日本の南で太平洋高気圧の勢力が次第に強まり、梅雨前線は日本海沿岸まで北上して東・西日本太平洋側や沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多くなりましたが、19日から20日にかけては、上空の寒気の影響で広い範囲で雷雨となり、成田空港でも19日に日降水量30.5mmを観測しました。下旬は東・西日本や沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多く各地で猛暑日となりました。成田空港でも27日に最高気温34.3℃を観測しました。

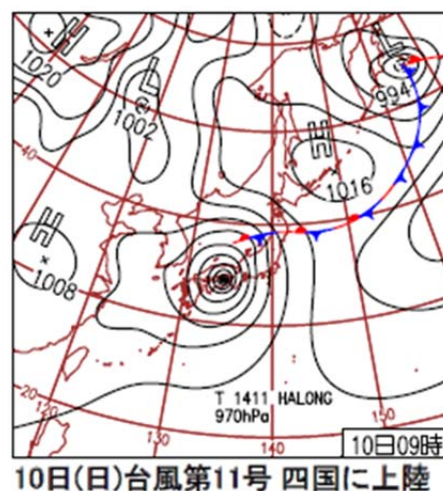


8月の気温と降水量



8月は、太平洋高気圧の本州付近への張り出しが弱かった関係で日本付近は湿った気流の影響を受けやすく、東日本、西日本の日照時間はかなり少なくなりました。上旬は台風第12号が東シナ海を北上、続く台風第11号が9日から10日にかけて四国に上陸して北上しています。この台風周辺の風と太平洋高気圧をまわる風の影響で、日本付近には南からの暖かく湿った空気の流れ込みが続き、8月1日から5日までと8月7日から11日までの総降水量が1000mmを超えた所もあり、全国的に大雨となりました。成田空港でも台風第11号の影響で10日の日降水量は30.0mmとなりました。中旬から下旬中頃にかけては、前線が日本海沿岸付近に停滞して北日本から西日本の広い範囲で大気の状態が非常に不安定となり、この期間も大雨となった所がありました。特に19日夜から20日明け方にかけては、広島県広島市で集中豪雨となり大規模な土砂災害が発生する事態となり、7月30日からの大雨について、気象庁は「平成26年8月豪雨」と命名しました。8月の気温については、東日本では平年並となりましたが、寒暖の変動が大きく、上旬は猛暑日となる所が多かった一方、下旬の気温はかなり低くなりました。成田空港も同様の傾向で2日に最高気温35.5℃、28日に最低気温18.1℃をそれぞれ観測しました。

注) 本統計に用いたデータは、成田空港の航空気象観測値整理表の値(統計期間: 1972年7月～2014年8月)を使用しました。



防災の話

「避難勧告」と「避難指示」はどこが違うの？

台風などの災害時にニュースで「避難指示」や「避難勧告」という言葉をよく耳にします。そのほかにも「避難準備情報」というものもあります。これらはどんな時に発令され、どれが一番、緊急性が高いのでしょうか？

この 3 つの中でもっとも緊急性が高く、強制力が強いのは「避難指示」で次に「避難勧告」、「避難準備情報」の順になっています。

また、「避難命令」という言葉を聞くこともありますが、日本では法律に基づく「避難命令」はありません。法律で規定されているのは「避難指示」と「避難勧告」のみです。「避難準備情報」は法律による根拠こそありませんが、自治体が地域防災計画に基づき発令します。



発令基準

■避難準備情報

避難勧告や避難指示を行うことが予想される場合に、それに先立ち発令されます。被害が予想される地域の住民、特に高齢者ら避難に時間がかかる人に早めの避難を呼びかけるものです。

■避難勧告

災害による被害が予想され、人的被害が発生する可能性が高まった場合に、発令されます。指定された避難所など安全な場所への避難を勧めるためのものですが、避難を強制するものではありません。

■避難指示

状況がさらに悪化し、災害によって人的被害が出る危険性が非常に高まった場合や人的被害が発生した場合に発令されます。避難指示が出た場合は直ちに避難しなければいけません。ただ避難しなかった人に対する罰則規定などはありません。



空もよう 「空の日」 気象イベント

気象庁では、気象知識や防災情報をより良く利用していただくために様々な広報活動を行っています。

成田航空地方気象台でも、「空の日」に合わせ、航空科学博物館とのコラボレーションにより「お天気フェア」を開催しています。今年は、9月20日（土）に開催しました。

出し物は、お天気相談コーナー、気象測器展示説明、気象実験に加え、これまでの経験から、「てるてるボーズ」作りなど親子で参加して楽しんでもらえるものを多く企画しました。

来場者の目的は、第一に航空科学博物館の催し物であるため、そちらに引っ張られる感はいなめませんが、なかには「今年も来たよ。いい催しだね。」とスタッフにうれしい声をかけてくださる方もありました。

「空の日」イベントの一環として成田空港ならではの「お天気フェア」です。次回開催の際は会場に足を運んでください。スタッフ一同お待ちしております。
(杉)



未来のお天気キャスター



はれるんクイズショー



てるてるボーズを作ろう



はれるんを釣っちゃおう





気象台からのお知らせ

今年度の航空気象講演会は NAA との共催により開催します。

日時：平成 26 年 10 月 7 日（火）14 時 00 分～16 時 10 分

（開場 13 時 40 分）

会場：NAA 本社ビル 1 階 S1～S4 会議室

講演：

1 部（NAA 主催）

演題：「いつか起こる大地震から命を守るために」

講師：大木 聖子氏

慶応義塾大学 環境情報学部准教授

2 部（気象台主催）

演題：「地震・津波情報をご利用いただくために」

講師：近藤 さや氏

東京管区気象台総務部業務課 地震津波防災官

編集後記

「石垣島では西南西の風、風力 3、天気快晴、気圧 1024 ヘクトパスカル、気温 28 度、那覇では南西の風、・・・」

皆さんはラジオ天気図を描いたことがありますか。中学生の時に理科の授業で描いたという人も少なくないでしょう。

ラジオ天気図とは、NHK ラジオ第 2 放送で毎日放送されている「気象通報」を聞いて描く地上天気図のことです。テレビやインターネットなどで、簡単に天気図などの気象情報が入手できるようになりましたが、それまでは貴重な気象情報として利用されていました。今でも漁業関係者や一部の登山者などに利用されていますが、特に高校総体の山岳競技では、競技の一部としてラジオ天気図の実技が採用されており、天気図の描画

と読解能力が順位に大きく影響します。

以前、ある高校からラジオ天気図の描き方を教えて欲しいという依頼があり、講師を務めたことがあります。今では気象台でも天気図を手で描く機会は極めて少なくなりましたが、気象現象を把握するためには、天気図を読む能力が求められることは今も変わっていません。

その後、高校の山岳部の顧問の先生からは、県大会で優勝し全国大会でも優秀な成績を挙げることができたと感謝の言葉をいただきました。

天気図を読む能力を高めるためには、天気図を描くことが近道であると入庁当時に先輩から教えられましたが、筆者は今でも暇をみつけてはラジオ天気図を描いています。（ひ）